

John Keats: “Negative Capability” の 「訳語」をめぐる概念の検証

藤 本 周 一

1. はじめに

小論は、“Negative Capability”の表わすべき意味を、日本語としてどのように表示すべきかという観点から検証しようとするものであり、必然的に訳語のあり方を問い直すことになる。その意味で、本稿は主として日本人研究者による論考のほか、Shakespeare など Keats とかかわりの深い詩人等に関する文献の日本語訳を考察の対象とした。

2. “Negative Capability”の日本語訳のことばとしての曖昧性

John Keats の “Negative Capability” の表わすべき意味をめぐる問題、つまりその概念規定の問題は、わが国においては、その訳語のあり方を含めて、なお検討の余地があると考えられる。例えば、何冊かの Keats に関する研究書ないし論文に目を通すだけでも、その訳語は「消極能力」、「消極的能力」、「消極的受容能力」、「消極的可能性」、「消極的でいられる能力」、「消極的未発能力」、「消極受容能力」、「否定の力」、「否定的創造力」、「否定的な能力」、「自己否定能力」、「可否定的能力」、「受容能力」、「ネガティブな受容性」などさまざまである。これらの訳語は、当該研究者それぞれによって、その表わすべき意味を論理的かつ具体的に表示するための工夫が凝らされていることは認められるものの、一部を除いては依然として、ことばとしての論理性と具体性に乏しいこと、換言すれば、ことばとしての客観性に欠けることは否定できない。つまり、訳語として、そのことばだけでは Keats 自身による当該部分の記述のコンテキストにおいて、その意味が充分理解されることは言い難いのである。あるいは論者Aがその訳語とそれに付与している意味が、そのまま論者Bの論考の “Negative Capability” にかかる記述のコンテキストにおいてはどうかと言えば、多くの場合、その妥当性は認め難いであろう。正直なところそれが筆者の実感である。率直に言えば、上記の訳語が日本語として一見してどれも同じ意味を表わすものであることが明白であれば、ここに敢えて論考の対象とするには当たらないであろう。しかし、いくら大雑把に考えるとしても、上述した各訳語が、日本語として、ただちに客観的に同一概念を表示することばであると理解されるとは思えないのである。もしこれらの訳語が明確に同一概念を示すことばであるならば、それぞれの Keats 関係の論考ないしイギリス・ロマン派研究論文等において、これらの訳語とともにその解説が、文脈上 “Nega-

“Negative Capability”の位置に、数学で行われるように「代入」された場合でも、論の展開に問題は生じないはずである。論理的に混乱を生じるとか、概念的に齟齬をきたすとか、あるいは一般的な文学論等における評語として使われた場合でも混乱は生じないはずである。しかし、現状はどうであろうか。もっと基本的に言えば、“Negative Capability”について述べた Keats 自身のことばの位置に、当該論考で使用されたその「訳語」とそれが示す概念ないしその解説を代入した場合はどうであろうか。

上に“Negative Capability”の日本語訳のいくつかを掲げたが、その訳語が用いられている当該論考において、訳語自体は同一であっても、その意味するところが論者によって必ずしも一様でないということがある。厳密に言えば、各論者が使っている訳語によって表わされる概念は、その論考の範囲においては明確であっても、それが一般的かつ客観的にその論考を超えて妥当性があるかとなると疑問である。さらに、同じ論者であっても論文等の執筆時期によって「訳語」が異なる場合がある。例えば、斎藤 勇博士のような学者でさえ、五たび訳語を改めている。考え方によっては、博士はそれほどこの「訳語」の決定に慎重であったと言えよう。論者によっては、ある場合には一つの論考において、同一の「訳語」でなく、表現を変えて使用しているケースさえある。従って、論考それぞれにおいて“Negative Capability”の概念規定を行ってからでないと論自体が成り立ち難いという状況にさえあるように思われる。このような状況は、文学批評的な意味で許容範囲にあるとして不問のままでよいかということである。

3. “Negative Capability”の着想と C. W. Dilke との関連性

そもそも“Negative Capability”の着想は、Dilke という Keats にとって親密な知人関係にあった人物の人物評にかかわったことが契機となっているようにも受け取れる。直接的にみても周知のように三度までも、すなわち、1817年12月21日付の“Negative Capability”について語った手紙では Dilke が登場し、1818年10月14日付の手紙では、Dilke を当代の思想家 Godwin にことよせて“Godwin Perfectibility man”と呼び、1819年9月24日付手紙では、“Godwin methodist”と称呼しているのである。しかも、この点はまだ誰も指摘していないと思われるが、このような明確な断定的人物評は、歴史上の著名な人物についてもそうであるが、弟妹たちに宛てた手紙で語られているということを慎重に考慮する必要がある。Dilke という人物との関連性がここで一つのポイントとなると思われる。なぜなら、一つにはこれらの手紙の調子には弟妹が相手ということで、どこか気が置けない内輪の雰囲気を感じられるからであり、Keats の発想としてはこの Dilke という「実理究明型」の人物の延長線上に Coleridge 等の姿が見えているように思われるからである。Keats が“Negative Capability”の有無をもって Shakespeare と Coleridge という二大詩人の詩人としての資質を截然と区別していることは、Hazlitt の影響関係を考慮するとしても決して小さな問題ではないはずであるが、そこに人生観照的要素が加味される可能性もあるのではないか。その意味では、Shakespeare ないし Coleridge を論ずるに当たっても“Negative

Capability”の表わすべき意味の解明は少なからぬ影響のある問題でもあると思われる。

“Negative Capability”なることばが提起されたときの状況は、Keatsによれば、直接的には、Dilkeが彼の話相手として引き合いに出されており、上述したように、この点にもう少し注意が払われてよいのではないかと考える。その意味で改めて当該部分の原文を見しておくことにする。

I had not a dispute but a disquisition with Dilke, on various subjects; several things dove-tailed in my mind, and at once it struck me what quality went to form a Man of Achievement especially in Literature and which Shakespeare possessed so enormously—I mean Negative Capability, that is when man is capable of being in uncertainties, Mysteries, doubts, without any irritable reaching after fact and reason—Coleridge, for instance, would let go by a fine isolated verisimilitude caught from the Penetralium of mystery, from being incapable of remaining Content with half knowledge. (下線は筆者)

Keatsが、Dilkeを相手にさまざまな問題について“dispute”(論争)ではなく“disquisition”をした折りに、「いくつかの事柄が鳩尾のごとく一つになって、たちまち思い当たったのは、どのような性質が——これはシェイクスピアが並外れて多く持っていた性質なのだ——とりわけ文学の方面で偉業を成し遂げるのに与かったかということ。私が言いたいのは“Negative Capability”というものだ。」と言っているからである。ここで確認しておきたいのは、KeatsがDilkeを相手に“dispute”ではなく“disquisition”をしたときに“Negative Capability”着想の契機となっていることである。“disquisition”は、話題はともかく、いわば「理路整然と二人が考えを述べ合ったとき」がその契機となったということである。そして、この手紙の上記引用部分はひととき慎重な読みが求められる。それは、次の二点に留意すべきと考えるからである。第一は、“disquisition”の直接の相手がDilkeであることと、上述したように、1818年10月14日付手紙ではDilkeを“a Godwin perfectibility Man”と呼び、1819年2月19日では“(Dilke) talks of nothing but the electors of Westminster and the retreat of the ten thousand”とあり、同年4月15日付手紙ではDilkeが息子の教育をめぐる腐心しているさまが具体的に語られている。さらに同年9月24日付手紙でもDilkeについて“Dilke will never come at a truth as long as he lives; because he is always trying at it. He is a Godwin-methodist”と極付けている。いずれもGeorge & Georgiana Keats宛の手紙なのだが、そこでは彼の人物、とりわけ彼の性格にかなり関心が払われていることである。そしてこの場合、重要なのは、“he is always at it”の部分である。なぜなら、Keatsの文人観に立てばその範疇には少なくともColeridgeが入ってくるからである。その観点からすると、第二は、上記引用部分で触れられているShakespeareやColeridgeにしても、単にその詩人的資質に加えて、いわばより全人的な人生観照的な意味で彼らの生きざまにも主眼が置かれているようにみられることである。

4. Keats における「忍耐」の姿勢

さらに、上の見方に立つと、時間的に多少前後するが、1818年1月23日付 B. Bailey 宛手紙の次の部分は、この場合、簡単に読み過ごせない意味をもって来るように思われる。下線部は、人間関係の種々の局面における忍耐の重要性を訴えている部分であるが、Keats の場合、人間関係はもちろん、人生にかかわるさまざまな問題にしても、それらに対処する必要に迫られたとき、その根底に辛抱強く待つ姿勢があることを認識する必要がある。

Things have happen'd lately of great Perplexity. You must have heard of them. Reynolds and Haydon retorting and recriminating—and parting for ever—the same thing has happened between Haydon and Hunt—It is unfortunate—Men should bear with each other—there lives not the Man who may not be cut up, aye hashed to pieces on his weakest side. The best of Men have but a portion of good in them—a kind of spiritual yeast in their frames which creates the ferment of existence—by which a Man is propell'd to act and strive and buffet with Circumstance. The sure way Bailey, is first to know a Man's faults, and then be passive—if after that he insensibly draws you towards him then you have no Power to break the link. (下線は筆者)

とかく、知性に訴え、理性的判断に傾く心の動きを抑制し、いわば張り詰めた忍耐によって、より総合的な解決を待つか、あるいはより深い理解によってより好ましい解決に向け、辛抱強く対峙する姿勢である。Keats にとって、詩人としての成功への道、換言すれば弟妹を含む現世的幸福への道はあくまでこの姿勢に甘んじるしかなかったと推考される。

Keats の実人生において、この点が最も顕在的なかたちで見られるのは、彼が詩人として起死回生の思いを籠めて悲劇“Otho the Great”を書き上げたことであろう。この作品が彼の希望どおりに当代一流の役者 Edmund Kean によって上演され成功することに、彼が極めて大きな期待を寄せていたことは彼の手紙¹⁾によって知られる。これは、1818年1

1) ①1819年6月17日付 Fanny Keats 宛には、“I was preparing to enquire for a situation with Apothecary, but Mr. Brown persuades me to try the press once more; so I will with all my industry and ability.” とある。

②1819年8月5日付 Fanny Brawne 宛には、“I leave this minute a scene in our Tragedy and see you (think it not blasphemy) through the mist of Plots speeches, counterplots and counterspeeches.” とある。

③1819年8月14日付 Benjamin Bailey 宛には、“I have also been writing parts of my Hyperion and completed 4 Acts of a Tragedy.” とある。

④1819年9月17日付 George & Georgiana Keats 宛には、“Mine I am sure is a tolerable tragedy—it would have been a bank to me, if just as I had finish'd it I had not heard of Kean's resolution to go to America. That was the worst news I could have had. There is no actor can do the principal character

月30日付 J. Taylor 宛手紙にみえる ‘Wherein lies happiness?’, ‘the gradations of Happiness’ のことば以来, Keats の人生において「幸福」は単に形而上的な探究の対象でなく, 常に現実的に解決すべき課題であったことを証し立てるものにはかならない。

とりわけ, 妹 Fanny をめぐっての問題で, 彼女の後見人 Abbey に対しても可能な限り対立を避けているように思われる姿勢にもこのことは窺われる。逆説的に言えば, 性急な解決を回避することによって, より有益な解決の仕方を探ろうと努力する心組みがかなり強固であることが窺えるのである。この問題をめぐる Abbey の自分に対する反応ないし動向は, 場合によっては詩人として立とうとする自分にもかなり深刻な影響を及ぼすものであることを Keats はじゅうぶん認識していたに違いないのである。従って, このような姿勢自体に, ただちに, 単に「受容的」な意味や「詩人的性格」²⁾までを含めて考察することの妥当性が改めて問題となるように思われる。少なくともここに言われている, “be passive” は「受けて立つ姿勢」であって, むしろ「忍耐」に通じると解される。1819年2月19日付 George & Georgiana 宛手紙でも, “for your’s and Fanny’s sake I will pluck up a spirit and try again. I have no doubt of success in a course of years if I persevere—but it must be patience” のように忍耐が強調されている。さらに, “Negative Capability” の手紙の2年近く後のものだが, これを補足してくれる Keats 自身のことばがある。それは, 1819年8月24日付 J. H. Reynolds 宛の手紙に見える次のようなことばである。時間的経過はこの能力の持続性を示す上で意味がある。ここに見える “of the selfish nature” はさらにその次の引用部分との関連からも注意すべき ‘phrase’ である。

I have indeed scarcely any thing else to say, leading so monotonous a life, except I was to give you a history of sensations, and day-nightmares. You would not find me at all unhappy in it; as all my thoughts and feelings which are of the selfish nature, home speculations every day continue to make me more Iron. (下線は筆者)

特に, 下線部の「自己中心的な私のあらゆる思考, 感情そして内的省察が日に日に私を鍛鉄のようにしてゆくのです。」という部分に続いて,

I think If I had a free and healthy and lasting organization of heart and Lungs—as strong as ox’s, so as to be able <to bear> unhurt the shock of extreme thought and sensation without

besides Kean.”とある。ちなみに, 下線部(筆者による)はいずれも Brown の提案による Brown 本人との合作の悲劇 “Otho the Great” のことを述べたもの。

- 2) Keats の手紙に見える ‘poetical Character’ の和訳である。このことばの和訳は, 論者ないし訳者によって「詩人的性格」と「詩的性格」の二通りがある。いずれの意味が, Keats の場合に妥当するかについては考察の余地があろう。「詩的性格」ということばは抽象的で, Keats の手紙におけるコンテクストに照らした場合, やはり「詩人としての資質」がポイントになっているとの判断から, 小論では「詩人的性格」とした。

weariness, I could pass my Life very nearly alone though it should last eighty years. But I feel my body too weak to support me to the height; I am obliged continually to check myself and strive to be nothing. < > 内は R. Woodhouse による補足 (原注)。(下線は筆者)

は、特に下線部すなわち「極端な思想や感情の衝撃にも傷つくことなく耐えられる牡牛のように強靱な」と「私は絶えず自己を抑制し、無になろうと努めているのです。」の部分
が重要と考える。なぜなら、健康に対する不安が募ってきたこの時期に、ひときわ厳しく「耐える」姿勢が色濃く出ているからであり、そのために、常に「自己抑制」に努めているのであり、その限りにおいてこそ、“nothing”の境地への到達が望まれるという言いかたをしているからである。ここに言われている「耐える」あるいは「自己抑制」は、やはり“Negative Capability”の機能とみて差し支えないと思われる。

5. “poetical Character”との関係

上の手紙の1年後の1820年8月16日付 P. B. Shelley 宛手紙で Keats は次のように述べている。

A modern work it is said must have a purpose, which may be the God—an artist must serve Mammon—he must have “self concentration” selfishness perhaps. You I am sure will forgive me for sincerely remarking that you might curb your magnanimity and be more of an artist, and ‘load every rift’ of your subject with ore. (下線は筆者)

ここに述べられているKeatsの芸術家観は、少なくともいわゆる「詩人の没個性」を前提要件とするものでないことは明らかである。それは必ずしも受容性を意味するものでもない。芸術家は“selfish”でさえあり得ると言っているからである。この場合、「芸術家」ということばは、Shelley に向かって言われているのであり、その意味でそれは「詩人」と置き換えても差し支えない。Keats のこのようなことばに出会うと、基本的に彼の自意識がかなり強く働いていることが認められるのである。“Negative Capability”をもって、文学の仕事に携わる者は、ただちに何よりもいわゆる消極的・受容的・受動的な性質を有すべきものとするには、果たしてそうだろうかという疑念を払拭しきれない。その方向での議論は、どうしてもいわゆる詩人の没个性的性格論に入り込んでゆくことになるからである。Keats のいわゆる「詩人的性格論」は、周知のように、“Negative Capability”の手紙の約10カ月後の1818年10月27日付 Richard Woodhouse 宛手紙に見える、「第一 (1st.)」と「第二に (In the second place)」の「第一」の部分で述べられている。ただ、“Negative Capability”と「詩人的性格論」とを関連づけた議論が比較的多いことは認めざるを得ないものの、この方向での議論はもう少し慎重であるべきと考える。少なくとも、“Negative Capability”と“poetical Character”とを同次元的に論じる方向は、“Negative Capability”の

訳語としての表示をいかに工夫しようとしても無理があるように思われる。というのは、“Capability” は基本的に「能力」を意味し、“Character” は「性格」でなくてはならないからである。能力を性格でもって説明する方向は議論として可能かどうか見極める必要がある。まずは、“Negative Capability” を “poetical Character” と関連づけて考えることの妥当性がとりあえず問題となりそうである。“Negative Capability” と “poetical Character” とを関連づけた論考が、「辞典」の解説を含めて、比較的多い中で、小川和夫教授の識別論は、この問題に関して、その明確性においておそらくわが国では随一で、傾聴に値する。同教授は、この二者は全く別物であるにかかわらず D. Bush は混同してごちゃまぜにして議論しているとして強く批判している。同教授は続けて、[戯曲の執筆中でも執筆後でも、シェイクスピアはいつもシェイクスピアであったのであって（つまり、「独自性」と性格を持った人間なのであって）、『オセロウ』を書きおえて「自己滅却」の契機がなくなったからといって、この大劇作家が「幸福」を失ったわけではない。同様にこの書簡を書き、『ブシュケへのオード』を書いていたとき、キーツは「詩人的性格」を失っていたわけではない。「詩人的性格」というものはそれにたいして「あこがれる」ようなものではなく、詩人である以上持たねばならぬ要件なのであり、詩人が自己を滅却するのは詩作の条件にほかならぬのである（どうしてこんなことがわからんで、キーツ論などという本が書けるのだろうか。] とまで述べている³⁾。

6. 問題点の整理

ここで、“Negative Capability” の表わすべき意味の検証に際して、筆者なりに作業のポイントと思われるものをいくつか项目的に掲げる。

- (1) Keats が、Dilke の生きざまをどのようにみていたかということである。この点については、Keats 自身が、“Negative Capability” の手紙の約 1 年 9 か月後の弟 George 夫婦宛の 1819 年 9 月 24 日付手紙で次のように言っているのがやはり参考になろう。この手紙は、前者に対して、Keats 自身による傍証的な意味をもつものとして重要であるので少し長くなることを厭わずに引用したい⁴⁾。

3) 小川和夫『キーツのオード 鑑賞と分析』大修館書店 1980年 34-36ページ。

4) ちなみに、この点については碩学齋藤 勇博士が学位論文‘KEATS’ VIEW OF POETRY’（昭和9年刊）を、昭和51年に『齋藤 勇著作集第五巻』に収載されるに当たって、かなり増補改訂されている。差し当たり、ここでは同学位論文の“Negative Capability”に関する部分についてみておきたい。Keats の1819年9月24日付 George & Georgiana Keats 宛手紙の一部（下線は筆者）を含めて、同著作集版での増補改訂された当該部分は以下のようになっている。この増補改訂は、‘Negative Capability’ の概念について考察するに当たって示唆的であると考えるので改めて掲げておく。この点は、齋藤博士の‘Negative Capability’ についての考察のあとをたどる意味においても注目すべきであろう。

According to Keats, ‘Negative Capability’ is a mental power which enables a poet to reach truth by means of impartial observations. Hasty conclusion is a danger; one ought to know every aspect of the

“He(=Dilke) thinks of nothing but ‘Political Justice’ and his Boy. Now the first political duty a Man ought to have a Mind to is the happiness of his friends. I wrote Brown a comment on the subject, wherein I explained what I thought of Dilke’s Character. Which resolved itself into this conclusion. That Dilke was a Man who cannot feel he has a personal identity unless he has made up his Mind about every thing. The only means of strengthening one’s intellect is to make up ones mind about nothing—to let the mind be a thoroughfare for all thoughts. Not a select party. The genus is not scarce in population. All the stubborn arguers you meet with are of the same brood. They never begin upon a subject they have not preresolved on. They want to hammer their nail into you and if you turn the point, still they think you wrong. Dilke will never come at a truth as long as he lives; because he is always trying at it. He is a Godwin-methodist. [()内および下線は筆者]

- (2)“Negative Capability” 着想の背景として考慮すべきことがある。詩を賛美するにあたって William Shakespeare と Erasmus Darwin とを混同しないような人と知り合えるのを自分は喜びとしているということが1816年10月9日付 C. C. Clarke 宛手紙で述べられているほか、Shakespeare への Keats の私淑ぶりは、その半年あまり後の1817年4月17日、18日付 Reynolds 宛と同年5月10、11日の B. R. Haydon 宛等の手紙によっても周知のことである。いま一つは、1817年5月10日付の Leigh Hunt 宛の手紙のほか、1819年4月21日付手紙は、Keats のキリスト教観を知る上で重要である。とりわけ前者の場合、Hunt が提起した宗教問題に関連して、「神と信仰」に関する深刻な社会問題が話題になっていることがこの際は注目に値する。つまり、このような社会的事象に対する Keats の見解に加えて、まさにこの時期に、Keats 自身の詩人になることの自覚の深まりが併行しているからである。換言すれば、“Negative Capability” なる能力を Keats が意識するに至る精神的な potentiality が醸成されていったと思われる。これは次のような Keats のことば（上掲 L. Hunt 宛手紙）にも象徴的に表われている。[()内および下線は筆者]

Tell him(=Shelley) there are strange Stories of the death of Poets—some have died before they were conceived “how do you make that out Master Vellum”. 上に掲げたいくつかの手紙には、詩人的自覚の深まりと併行して、現実的に詩人として立ち、かつ成功することの厳しさに対して、偉大な文人 Shakespeare の存在が強く意識されるなかで、Keats 自らの心組みが形成されていくプロセスらしきものが感ぜられるのである。このことが、やがて Dilke との “disquisition” を契機として “Negative Capability” が着想される、いわば時間的前奏をなしているものとみることができるのであり、重要と考える。

- (3)1817年10月8日付 B. Bailey 宛手紙では、Keats の詩作をめぐる Haydon と Hunt との

matter before the final decision. For some time one should ‘remain content with half-knowledge’. In the following quotation from a later letter may be taken as a clarification to a certain degree of the obscure phrase ‘Negative Capability’: ‘the only means of strengthening one’s intellect is to make up one’s mind about nothing—to let the mind be a thoroughfare for all thoughts’

あいだの感情的トラブルについて述べられているが、さらに詩作に関して「ベイリ、私が詩作をいかに独自にやってきたかは君なら分かってくれるでしょう。」ということばが見える。ここで、「詩作をいかに独自にやってきたか」の部分に留意する必要がある。さらに、「Hunt の諫止も私には無駄でした」と述べたあとで、「シェリーを訪ねるのを私は断りましたが、それは私自身の拘束されない領域を持てるようにするためです。」と言っている。「独自にやってきた」そして「拘束されない領域」によって示される具体的な姿勢には、“Negative Capability”によって表わされる能力の作用を認めてよいのでないか。また、1817年11月22日付 B. Baily 宛手紙では、「想像はアダムの夢に擬えられるでしょう。—アダムは目を覚まして、その夢が真実であることを悟ったのです。私は殊の外この問題に執心しています。と言いますのは、どんなことでも連続的推論によって真実であることが分かるとは、私には今でも思えないからです。—尤もそのようにして真実であることが知られるべき必然性はあるのでしようが。」とも述べている。これらのことばは“Negative Capability”の見える手紙の1、2カ月前の手紙に表明されている Keats 自身のことばであるだけに、(2)に述べた状況とともに注目されるべきであろう。そこには「私自身の拘束されない領域」を守ることが強く意識されていると思われるからである。“Negative Capability”がしっかり意識され、維持されていなければ、それは守りきれぬものでなかったとみるほうが蓋然性が高いであろう。(下線は筆者)

(4)“Negative Capability”と“poetical Character”とを、直接的には言わぬまでも、かなり近似的に関連づけた論考は少なくないが、この場合は、前者が述べられた1817年12月21日付二人の弟宛手紙と、後者が論じられた1818年10月27日付 R. Woodhouse 宛手紙とのあいだには約10カ月の時間的隔りがあること、そして、(1)の Dilke の性格に触れた1819年9月24日付弟 George 夫婦宛手紙は、その後さらに約11カ月の時間的経過があることも併せて考慮する必要があるであろう。つまり、Keats に強く意識された“Negative Capability”なる能力は、少なくとも、約1年9カ月以上にわたって機能していたことは明らかである。しかも、その1年9カ月という期間の始めと終わりの時期の弟妹たち宛の手紙に、やはり Dilke が登場しているのは偶然とは思えないのである。Dilke とのこのようなかかわりには、Keats 自身のことばによるものであるだけにもっと留意する必要があるのではないか。そういった時間的背景が想定されなければ、Keats の ‘annus mirabilis’ といわれる1819年の珠玉の“Odes”群が生み出されるに至った Keats の内面における芸術的必然性のようなものは理解され難いのではなかとさえ思われるのである。なお、“Negative Capability”と「詩人的性格」との関連性の問題については、その基本的な部分において、さきに触れたように小川和夫教授の所説は示唆的である。

(5)1995年に S. Coote が指摘した点はやはり看過することができない。この指摘は、筆者がかつて『浪漫詩人の愛と苦悩』(昭和48年)の「解説」において、“Negative Capability”の“Negative”は医学 (medicine and surgery) ないし薬学 (pharmacy) に由来するのではないかと仮説のもとに解釈を試みた発想に類似した観点に立っている。ただ、筆者が、薬学でいわれる薬品に対する「耐量」なることばが、この場合、意味的に妥当する

のではないかとみたのとは異なる。Keats の言う “Negative” は、彼が受講した「化学」に由来すると Coote はみているのである。そしてこの場合の “negative” は “like an electrical power” であって、その “receptive power” としては “positive current” と等量になるとみてよいと解説している。参考までに「注」として、その所論の当該部分を引用、後掲しておく⁵⁾。

(6)Coote や Ward その他の多くの研究者が指摘するように、Hazlitt がイギリス詩人について行った連続講演の聴講者のなかに Keats がいたことは、この際、特に Shakespeare とのかかわりにおいて重要である。それは詩人として立つことを自覚し始めていた若い Keats に何らかの刺激を与えなかったはずがないからである。しかも彼がかねて Shakespeare に私淑していたとなればなおさらである。この点については岡地 嶺教授の所論に詳しい⁶⁾。“Negative Capability” なる能力を彼が意識したことは、政治や社会のありかたにかかわる問題に対して何らかの立場に立つとか、あるいは何らかの意見を開陳するとかの是非について、文学に携わる者は現実的に慎重にならざるを得ないという認識を明確にしたものと理解される。ここに、Shakespeare の生きざまに、Keats が注目した一つの接点があるとみてもあながち牽強付会にはならないであろう。なぜなら、そこからこそ Keats が決め手としたことば、つまり偉大な詩人にあっては、“the sense of Beauty” の働き以外のものすべてを否定し去る能力の有無が問われることになることに Keats が思い至ったと考えられるからである。

(7)“Negative Capability” という表現上の着想は Wordsworth の “wise passiveness” にヒントを得ているとの見方をとる立場がある。これには、表現上の類似性だけでなく、その概念的 content においても類同的であるとする見方と、着想はともかく概念的には峻別すべきとの考えに立つものがあり、一様でない。この検証には Wordsworth の考え方に対する Keats の考え方がどうであったかということが当然のことながら問題となる。この点についてはすでに何人かの研究者によって論じられているが、松浦 暢教授の所論に詳しい⁷⁾。

5) Coote, S., JOHN KEATS A Life, Hodder & Stoughton, 1995, p. 115.

“This famous passage (=The part of Keats’ letter wherein the function of his “Negative Capability” is explained) draws on Keats’s own temperament, on impressions and ideas derived from those about him, and is above all a plea for that receptivity and openness which the words themselves exemplify. There is much here of Hazlitt’s ideal disinterestedness and of that spontaneous intensity Keats so relished in the acting of Kean. Astley Cooper’s disparagement of sweeping theory may also have played its part (the timbre of a great intellect lingers in other minds long after the immediate occasion has passed), while the choice of the word ‘negative’ almost certainly derives from Keats’ chemistry lectures, where negativity implied not a rejection, a minus or an absence, but rather a sympathetic receptive intensity. Just as, for Bailey, Keats had compared the actions of great minds to catalists, so, for his brothers, he could imply that the ‘negative capability’ of the true poet was like an electrical negative: passive but, in its receptive power, quite the equal of the positive current.” [()内は筆者]

6) 岡地 嶺『イギリスの詩と批評』泰文堂 昭和50年 324-332ページ。

7) 松浦 暢『キーツ——その夢と現実』吾妻書房 昭和54年 89-99ページ。

- (8) H. Read は、Keats による “Negative Capability” 着想の背景に、彼が “Tristram Shandy” に親しんでいたことがあることに着目し、その作者 L. Sterne の創造した Yorick なる人物からヒントを得ている可能性を示唆している。Sterne 自身が Keats のいわゆる「事実や理由を性急に追求することをせず、不確実、神秘、疑惑の状態にとどまっていられる能力を持つ人間」だったからと解説しているが、傾聴すべき指摘である⁸⁾。
- (9) 伊木和子教授は、Keats が “Negative Capability” を思いついたのは、「大天才モーツァルトのオペラ『ドン・ジョヴァンニ』のパントマイム化されたもの（原型を残さないほどに改作されたクリスマス用娯楽作品）をドゥルアリー・レイン劇場で見た直後だった、という事実を書き添えておきたい。」としている⁹⁾。同教授以外に、少なくともこの場合、Keats がこのパントマイム化された作品を見て帰ったことと、“Negative Capability” の着想との関連の可能性を指摘した論考を筆者は知らない。
- (10) K. Burke が自著 “Symbolic Action in a Poem by Keats” の註として引用した W. Knight の指摘も参考になろう。即ち、[キーツには、つりあいをとっている姿、動きをはらむ静止、あるいは、〈つまさき立ち〉的な風趣とも呼ぶべき状態を、くりかえし想像・写象する特有の回帰的な性向があること]について言及している。¹⁰⁾ Knight のこの指摘は、「つりあい」をとる姿勢をキーツの性向とみている点に関心をひく。この指摘に関連しては、心理学的ないし精神医学的検討が必要であろうが、例えば、何人かの子供がありながら不幸にして両親が早世したような場合、弟妹たちに対する責任や配慮から長子に比較的多い性向ではないかと思われる。つまり、生活や人生にかかわる問題の是非の判断に際して慎重を期す性質である。
- (11) 比較的最近刊行されたか、再版された研究書等においては “Negative Capability” が「消極的にしていられる能力」というふうに改訳されている場合が比較的目につく。この訳語自体は具体性があり、従って独立したことばとしても分かりやすいのであるが、この場合の一つの問題点として、「消極的にしていられる能力」ということばを、直線のかつ積極的に詩人的性格に関連づける方向は、Keats の “Negative Capability” について語られた手紙とそれ以外の手紙との時間的間隔、それらの手紙で触れられている人物評およびその受取人等との関係を踏まえてさらに検証する必要があるのではないか。さらに、この「消極的にしていられる能力」という表現は、この場合、日本語として、やはり誤解を招きかねない。なぜなら、この場合の ‘negative’ は、精神的ないし心理的に決して手を拱いているような意味での消極性を示すことばというよりは、Keats の場合は、むしろ自己に迫る深刻な問題であろうと、それを先ず受け止め、それに対峙しつつ、文学に携わる者として、作詩と現実の生活を問わず、あり得べき解決に向けての意志を表示することばでなくてはならないからである。そこには強い否定的な意志の存在が想定さ

8) 北條文緒(訳)『ハーバート・リード自伝』1978年 408ページ。

9) 伊木和子『キーツの世界』研究社出版 1993年 151ページ。

10) 松下千吉(訳)「キーツの一頌歌における象徴的行為」(『世界批評大系 6』所収) 1974年 174ページ。

れるのである。

(12) いま一つは、Keats 論において言及される「放心状態」の問題である。例えば、かつて佐藤 清教授は“Negative Capability”の解明に際して、いわゆる「放心状態」との関連にある程度の力点を置いて論を展開している¹¹⁾。しかし、Keats の詩人的性格論が議論される際にほとんど必然的に触れられる放心状態ないし無気力状態は、むしろ Keats に特有な死の想念にかかわるとみるほうが真実性があるように思われる。無気力状態とは、一般的には、いわば一時的にせよ自己の生存にかかわる厳しい状況の打開策が尽きた心境に至って、精神的にも心理的にも八方塞がりとなり茫然自失に陥って諦観的になった状態をいうはずのものであろう。それが詩人 Keats に特有な「放心的状態」あるいは「無感覚状態」であるとすれば、そうして、それが詩的想像に深くかかわる必然的な心的状態であるとすれば、やはりその関連性について最小限の精神医学的あるいは芸術心理学的な説明が必要であらう。Keats の場合は周知のように両親と末弟との死別、自分にも忍び寄る病魔のことなどのほか、無理解な後見人 Abbey のもとにおかれていた妹の身の上、自分の悲恋などに加えて詩人として立つことの厳しさの自覚など、そういう意味で彼を時としてしばしいわゆる放心状態に追いやったとしてもむしろ自然であり不思議ではない。1817年5月の Haydon 宛手紙には“occasional depression”（時々の意気消沈）、11月の Reynolds 宛には“abstraction”（放心状態）などが見え、さらに“Negative Capability”の手紙の約5カ月後の1818年5月21日付 Bailey 宛において、Keats 自身が“I have this morning such a Lethargy that I cannot write—the reason of my delaying is oftentimes from this feeling—I wait for a proper temper.”と言っている。この場合の‘Lethargy’は医学用語としては「昏睡」であるが、ここでは一般的に「無気力」が当たっているであろう。もう一つ、この場合の“I cannot write”の目的語は「詩」ではなく、むしろ「手紙」の類とみるほうがコンテキストに照らして妥当性がある。従って、そのような無気力状態それ自体を“Negative Capability”と同質的なものあるいは類同的なものとみる見方にはどうしても疑問が残る。“Negative Capability”にかかわる Keats のことばは、“a man of Achievement especially in Literature which Shakespeare possessed so enormously”とあり、要するに、そこには暗に文人としての成功という目標が自分の仄暗い生活の中に瞥見するかのごとく意識されているようにさえ感じられる。そこにはまた、彼の家族を含む現世的幸福への願望が窺知されなくもない。また、この問題に関しては、その約10ヶ月後の1819年3月19日付弟 George 夫婦宛手紙の次のようなことば、すなわち、

“My passions are all asleep from my having slumbered till nearly eleven and weakened the animal fibre all over me to a delightful sensation about three degrees on this side of faintness—if I had teeth of pearl and the breath of lillies I should call it langour—but as I am I

11) 佐藤 清『キーツ研究』南雲堂 1968年 40-46ページ。

must call it Laziness.”

を併せて考察する必要がある。この直ぐあとに、「脳の繊維状組織も身体の他の部分と同様に弛緩状態にあるのだが、その楽しい程度のほどは悦楽にしても誘惑の気配など全くなく、苦痛にしても我慢できないほどの齧めっ面は微塵も見せないのだ」ということばが続いているからである。Keats が言う、いわゆる「無気力状態」は意識としては、必ずしも詩的創造にかかわるものでないように推考されるのである。

(13)ここで、わが国で最近刊行された英米文学関係の辞典類6点について“Negative Capability”に関する記述を概観しておくのは、改めてその概念的検証の上で参考になろう。掲載は刊行年順とする。(下線はいずれも筆者)

- ①福原麟太郎・吉田正俊編『文学要語辞典(改訂増補版)』〈昭和53〉では‘negative capability’の見出しのもと、[“negative capability”「消極的にしてられる能力」⇒ CHAMELEON POET.] となっており、CHAMELEON POET の項では、[「カメレオンの詩人」Keats によれば、真の詩人は自我(identity)をもたず、カメレオンの如くに、太陽や月や海や男や女に、自在に変貌する。これは彼のいわゆる「消極的にしてられる能力」(negative capability)をそなえた詩人を比喩的に言ったものであって、彼の詩観の中心をなしている。]となっている。
- ②斎藤 勇監修、西川正身、平井正穂編『英米文学辞典』(第三版)〈1985〉では、‘negative capability’の見出しのもと、[Keats が弟たちにあてた手紙(1817年12月21日)で用いた言葉。「消極的でられる能力。」Shakespeare が悠然として、不確実なことをそのままに看取して、それを事実としたり理屈をつけたりするような焦燥をまぬかれ、無理をしないでられる性質をいう。したがって、自己を空しくして対象の中へ没入し、そこから偉大な創造をかちえることを巧みに衝いた句とも見られ、T. S. Eliot などのいう非個性説(‘an escape from emotion’)とも通じるものがあり、Keats の批評的な感覚の鋭さを示している。]
- ③M. グレイ著・丹羽隆昭訳『英米文学用語辞典』〈1990〉では、‘Negative Capability’の見出しのもと、[批評家たちはこの語句をしばしばもう一通の手紙との関連から説明する(1818年10月27日付の Woodhouse 宛のもの)。その手紙の中では、Keats は自分の詩の性格が「ワーズワース的あるいは自己中心的崇高」と対立するものだと主張している。つまり彼は、自分には正体も性格もなく、いつも自分以外の誰かの体を満たしており、それゆえに善と同様に悪をも想像して喜びにひたると言うのである。／それゆえ、消極的能力とは(Keats が大いに所有していた)芸術家の共感的想像力、すなわち自分の個性を忘れ、想像によって他人や他の種類の存在へと入ってゆける能力のことである。EMPATHY, GUSTO の項目も参照のこと。]
- ④松島正一著『イギリス・ロマン主義事典』〈1995〉では、‘消極的能力 Negative Capability’の見出しのもと、[「消極的能力」とは、シェイクスピアにあってコウルリッジに欠けているもので、それは自己を空しくして対象の中に没入し、そこから偉大な創

造を勝ち得ることである。この考えは T. S. エリオットのいう非個性説（‘an escape from emotion’）とも通じる考えでもあろうが、エリオットが詩的媒体への詩人の自己放棄を言っているのに対して、キーツは「この世とさらに偉大なるものを形成する素材としてそこに内包されているもの」への放棄を言っているのだ。キーツはエリオットよりもウォーレス・ステイブンス（Wallace Stevens, 1879-1955）により近い。]

この解説の後で、“negative capability”の手紙に関連する手紙として1818年5月3日付 H. Reynolds 宛と同年10月27日付 R. Woodhouse 宛の手紙を挙げ、解説を加えている。ちなみに、この事典の“Grotta”の項目の解説に関連して Keats の ‘Endymion Book IV’ に見える ‘The Cave of Quietude’ に触れ、これを Negative Capability の働く場としているが、少なくとも、Endymion の第四巻第512行から551行までを読む限り、その理解は筆者にはむずかしい。ただし、この点については佐藤 清教授が『キーツ研究』において詳論している。

- ⑤川口喬一・岡本靖正 [編]『最新 文学批評用語辞典』〈1998〉では、「消極的能力」の項目のもとに [キーツはたとえばシェイクスピアのような傑出した人物が身につけている能力を「消極的能力」とし、その特性を「不確定、不可解、疑惑の状態にあっても慌ただしく事実や理由を求めない能力」と規定し、その状態に達すれば、詩人にとっては「美」のみが唯一絶対のもの、それさえあれば他のものはいっさい考慮に値しないものとなる、と言う。] とし、[キーツは消極的能力とは反対に、ワーズワスに見られる極端な自己中心的意識を「自己中心的崇高 (egotistical sublime) と言って非難した。] と付帯的解説を加えている。
- ⑥上田和夫編『イギリス文学辞典』〈2004〉では、‘negative capability’の項目のもと [消極的（受容）能力。Keats が1817年12月に弟夫妻へ宛てた手紙で述べた言葉。これは、Keats によると、Shakespeare が有している文学的資質で、「人が不確実さとか不可解さとか疑惑の中にあっても、事実や理由を求めていらいらすることが少しもなくていられる状態」で、「半解の状態に満足していることができない」（田村英之助）Coleridge には欠けている、とされる。ここでの Keats の真意は必ずしも明確ではないが、この語はおおむね、対象に没入するのではなしに、客観的に距離を保ち得る非個人的な作家の態度をさすようになってきている。T. S. Eliot のいう非個性説（“an escape from emotion”）とも通ずるものがある。（笠）] となっている。ちなみに、この辞典の「Keats」の項では、「その膨大な書簡中に書かれた思考原理としての ‘negative capability’（消極的受容能力）は、彼の人生に対する倫理的真摯さと現実意識の鋭さをよく示している。（上）」となっている。一冊の辞典でありながら「項目」によって、「受容」の部分に（ ）がついている、ついていないの相違は少し考えさせられる。

以上、いくつか議論のポイントとなるものを挙げてみたが、いずれにしても、例えば、“Negative Capability”を日本語訳した場合、「消極」に傾きすぎると、印象としては、やはり、それはあれほどに詩的想像力と生活力の旺盛だった Shakespeare のイメージから遠

のくように思われる。ことばとしての「消極」はどうしても隠遁的な響きが籠るからである。その際、多くの場合、「消極」ということばに見合ったかたちで関連づけられるのが詩人的性格である。いま一つ、「自己否定」あるいは「受容」という形容詞を冠した訳語の場合も、詩人的性格論との関連性から、いわゆる T. S. Eliot 流の没個性論への展開が強調される傾向がある。果たしてその方向での解釈で能事終われりとしてよいかどうか。しかし、このような方向での議論は、例えば、上述したように、Keats が当初に引き合いに出した人物 Dilke との関連性や、弟妹たちに宛てた手紙の内容の特性との関係が薄らいでくることは否定できない。松浦教授が指摘しているように¹²⁾“Negative Capability” が、単一の指示語^{レフアレント}では表示不可能な複合的な意味合いがあることを考慮するとしても、なお、果たしてそれで十全であろうかという疑問を払拭しきれない。他方、逆説的な言い方になるが、Shakespeare を主体としてみた、あるいは Shakespeare との関連で論じられる場合は、“Negative Capability” は、こんにちとは違って、当時はとりわけ国家の政治的体制あるいは社会問題や制度に対して反対意見ないし批判的意見を積極的に表明しない態度、いわば国家反逆罪のような重罪を恐れてかなり慎重な姿勢を示すという意味に力点のかかった論述になっている傾向があるように思われる。時代は異なるとはいえ、Keats からすれば、自分が L. Hunt 派の一人と目されていることが詩人として立つ上で何らかの批判の対象、場合によっては非難の対象とさえなるのではないかとの危惧ないし予感があったのではないかとの推測も成り立たないわけではない。そのことは、同時に彼の密やかな現世的幸福志向とも無縁ではないように思われる。

Dilke との関連性に注意すると、前述したように、“Negative Capability” は、自己に対して突きつけられる問題、例えば、政治的な、社会的な、あるいは家庭的なさまざまな問題、とりわけそれと関連して友人、知人あるいは社会一般と意見を異にするような場合に生ずる複雑な人間関係に対処するうえに、「恠性」ないし「忍耐能力」としての意味合いが比較的強く出てくるように思われる。その際、何よりも Dilke の人生観に対する Keats の批判が“Negative Capability” 着想の契機になっているとみられるからである。

さらに、上掲(13)の6種の「文学辞典」類の解説をみると、⑤に掲げた『最新 文学批評用語辞典』のほかは、いずれも“Negative capability”を「詩人的性格」と関連づけている点では共通しているが、その「解説」自体は必ずしも一様でない。とりわけ、T. S. Eliot の「没個性説」とのかかわりについて、いわゆる「対象に没入する」とするものと「対象に没入しない」とする立場とに分かれているほか、②の『英米文学辞典』では、「T. S. Eliot などのいう非個性説 (an escape from emotion) とも通じるものがあり、」としていて慎重な表現になっている。ただ、「詩人的性格」と関連づけるにあたっての理由についてはいづれについても、辞典として一つの項目の解説であることから字数の制約があるためか、あまり明確でない。記述されているだけの内容で、“Negative Capability” の解説として充分であるとみてよいかどうか。この点について言えば、『最新 文学批評用語辞典』

12) 松浦 暢 前掲書 80ページ。

では、「詩人的性格」には触れられていないので、当該用語の解説に当たってより慎重な姿勢が窺える。

いま一つ、Keats の詩作における Wordsworth あるいは Coleridge とのかかわりは決して浅いものではない。Keats は、Shakespeare と対蹠的位置に立つ詩人として Coleridge を挙げているが、Coleridge が Keats の詩に与えた影響はかなり大きいのである。この点については岡地教授が両者を Hazlitt との関係において詳論している¹³⁾。すなわち、Keats の Coleridge 観は Hazlitt の影響が大きいこと、しかもその影響関係は、Keats において常に一定不変の potentiality をもっていたとは考えにくいということである。つまり、Keats としては“Negative Capability”を問題意識として堅持していない限り、いわゆる自分の詩人としての知性を錬磨する保障はないのだとの自覚が確信的にまでなったということではないだろうか。このようにみると、例えば「自己を空しくして対象へ没入する」ことまでを“Negative Capability”それ自体の機能に含めて解釈し、それに見合った訳語をこれに充てるとすれば、それはやはり“Negative Capability”自体の解釈として妥当かどうか再検討の余地があると考えられる。「再検討」ということばが厳しすぎるようであれば、少なくとも再確認のための作業は必要であろう。

7. 文学論一般の観点から

以上において、ポイントと思われるいくつかの視点から区分しつつ概観したが、“Negative Capability”の概念規定に関する問題は、少なくともイギリス・ロマン派に関する研究全体に深くかかわる問題でもある。さらに、“Negative Capability”がイギリス文学論を超えて、文学論一般においても一つの普遍妥当的な概念を内包する用語として使用される可能性があるとするれば、この問題は軽視されてよいものでない。むしろ、その概念を明確にし、普遍妥当性のあるものとして、できれば訳語を統一すべき時期にきていると言っても過言でないであろう。例えば、最新の学問的成果を踏まえた本邦初の本格的なシェイクスピア辞典とあってよい『研究社シェイクスピア辞典』¹⁴⁾でも、Shakespeare から大きな影響を受けた一人として Keats の名が挙げられている。それは、やはり必然的に“Negative Capability”がかかわってくるからである。同辞典においても簡略ながらその点を中心に解説がなされている。Shakespeare の解釈ないし鑑賞に当たって、Keats のこのことばが有効であるとするれば、一般的文学論においてもこのことばによって示される概念の検証とその客観性の確認が必要であろう。例えば、飯沼 馨、蜂谷昭雄、深瀬基寛、藤井武昭、望月登美子、W. J. Bate, J. Dewy, G. S. Fraser, N. Frye, S. Spender, H. Read, R. Williams, J. D. Willson などの学者・研究者の論考において‘negative capability’が評語として使われている。だとすれば多少は煩瑣であっても、少なくとも具体性と論理性の観点から訳語と

13) 岡地 嶺 前掲書 315ページ。

14) 小津次郎ほか編 研究社出版 2003年。

しての日本語それぞれの表わすべき意味を吟味検証し、整理し、現状を是正するのでないといけないであろう。そのような作業によって、より適正な訳語を選定する必要があるのではないか。そして、そのことによって、その訳語が少なくとも Keats 論のかなり基本的な部分を規定するものである意味において、あるいはイギリス・ロマン派研究、さらに文学批評一般においても、明確な概念を内包するテクニカル・タームとして認証を与える必要があるように思われる。

いま一つ、“Negative Capability” 論においてよく引き合いに出されるのが Wordsworth の “wise passiveness” との着想の類同性ないし関連性の問題である。概念的に “wise passiveness” との類似性を説く研究者は少なくないが、野島秀勝教授は明確にこれを否定している¹⁵⁾。“wise passiveness” との関連については、いわゆる “the Burden of Mystery” をめぐっての両詩人の感性の違いを中心に松浦 暢教授が最も詳細かつ明快に識別している¹⁶⁾。

以上において、筆者なりの見解を付しつつ “Negative Capability” の概念とその訳語のあり方をめぐる問題に関する現状を概観したが、以下にみるように、“Negative Capability” は、先ずその日本語訳の多様さに驚かされる。さらに訳語が同じであっても研究者等によってその意味する概念が必ずしも一定でない場合があることを考えると、前述したように、この問題にかかわる論考のたびに、その前提としてこのことばの概念的説明が必要とされる現状は放置されておいてよいものではないであろう。

この小論が上述のような “Negative Capability” にかかわる諸問題の整理のための資料提供の役割を果たせればと思っている。小論執筆にあたって、筆者の研究テーマの上からとは申しながら、わが国の多くのイギリス・ロマン派研究者あるいは Shakespeare 研究者等の研究業績を資料として使わせていただいたことに深甚の謝意を表したい。この資料による “Negative Capability” の日本語訳を「一覧」のかたちで以下に「8.」として掲げた。

なお、“Negative Capability” の表わすべき意味とその訳語について、筆者なりの結論を開陳すべきであるが、これについては稿を改めたい。

8. “Negative Capability” の訳語《資料》

とりあえず、筆者の収集した資料に基づいて日本語としての訳語を掲げてみる。研究書と論文いずれの場合も研究者別とする。掲載は研究者氏名のアイウエオ順かつ著書等の刊行年順とした。外国人による著書の場合は、資料整理の都合上、その氏名の発音の日本語表記のアイウエオ順とした。アイウエオ順とした理由は、主として、一人の日本人研究者ないし訳者が時間を措いて、あるいは機会を変えて何回か訳語を改めているケースがあることによる。極端な例としては、同一書物の中で「訳語」が改変されて論じられている

15) 野島秀勝『自然と自我の原風景 上』南雲堂 昭和57年 148ページ。

16) 松浦 暢 前掲書 89-99ページ。

場合がある。

[1] “Negative Capability” に訳語を与えているもの

1. 相原幸一著「H. Read を貫くもの」『英語文学世界 第五巻 第六号』（昭45）「消極能力」
2. 相原幸一著『ハーバート・リード研究』（昭46）〈p. 30〉「消極能力」
3. 安藤幸江著「二つの「ハイペリオン」におけるハイペリオンの描写について」『イギリス・ロマン派研究 第3号』「消極的受容力」
4. 安藤幸江著「イギリス・ロマン主義とドイツ・ロマン主義」『『イギリス・ロマン派研究』所収』（1985）〈p. 419〉「消極的受容力」
5. 安藤幸江著『キーツ 二つの「ハイペリオン」』（1988）〈p. 11〉「消極的受容力」
6. 安藤幸江著『キーツ 光への旅』（1998）〈p. 123〉「消極的受容力」
7. 飯沼馨著「三十年代における英国作家の動向」『飯沼馨編『作家と政治』（昭33）所収〉〈p. 42〉「消極的能力」
8. 伊木和子注『キーツ書簡集』《研究社小英文叢書-203-》（昭46）〈p. 126〉「消極的能力」
9. 伊木和子著『キーツの世界』（1993）〈p. 55〉「消極的受容力」
10. 磯田光一著『イギリス・ロマン派詩人』（昭54）〈p. 227〉「受容能力」
11. 上田和夫執筆 “Keats”『上田和夫編『イギリス文学辞典』（2004）の当該項目〉〈p. 190〉「消極的受容能力」
12. Williams, R. 著：若松繁信・長谷川光昭訳『文化と社会』（昭43）〈p. 48〉「消極的能力」
13. Wilson, J. D. 著：小池規子訳『シェイクスピア真髓』（1977）〈p. 102〉「消極的能力」
14. Weidlé, W. 著：前田敬作・飛鷹節共訳『芸術の運命』（1975）〈p. 247〉「否定的能力」
15. Welck, R. · Warren, A. 著：太田三郎訳『文学の理論』（昭42）〈p. 70〉「消極的な能力」
16. 梅原義一訳『キーツ書簡集』（昭26）「消極的能力」
17. 大林輝彦著「憂鬱のオード」『『イギリス・ロマン派研究』（1985）所収〉〈p. 581〉「消極的能力」
18. 岡田章子著「キーツと日本の心」〈『イギリス・ロマン派研究 創刊号〉「否定的能力」
19. 岡田章子著『キーツの詩』（1986）〈p. 177〉「消極的能力」
20. 岡田章子著『魔法と妖精』（1991）〈p. 9〉「消極的能力」
21. 岡地嶺著『イギリスの詩と批評』（昭50）〈p. 328〉「消極的能力」
22. 小川和夫著『キーツのオード 鑑賞と分析』（1980）〈p. 34〉「消極能力」
23. 笠原順路著「キーツの卑俗性」『『イギリス・ロマン派研究』（1985）所収〉〈p. 475〉

「消極的受容能力」

24. 笠原順路執筆 “negative capability” 《上田和夫編『イギリス文学辞典』(2004)の当該項目》〈p. 244〉「消極的(受容)能力」
25. 片岡小百合著『キーツにおける「対置と融合」の表現形式と「消極能力」〕〈「イギリス・ロマン派研究創刊号」〉
26. 加藤紀子著「キーツとスペンサー」《『イギリス・ロマン派研究』(1985)所収》〈p. 464〉「消極的能力」
27. 桂 文子著「ロマン派の時代」(桂・小林・吉田編『人間と文学』(1996)所収)〈p. 165〉「消極的でいられる能力」
28. 加納秀夫著「文学の可逆平衡」《「不死鳥」〈第二輯〉》(昭24)〈p. 97〉「否定的創造力」
29. 加納秀夫著『イギリス浪漫派詩人』(昭26)〈p. 142〉「否定の力」
30. 加納秀夫著『英国ロマン派の詩と想像力』(1978)〈p. 86〉「否定の力」
31. 上島建吉著『虚空の開拓』(1974)〈p. 91〉「消極的能力」
32. 上坪正徳著「ハズリットの批評と想像の共感作用」《『ヴィジョンと現実』(1997)所収》〈p. 267〉「消極的能力」
33. 川口喬一・岡本靖正編『最新 文学批評用語辞典』〈p. 136〉「消極的能力」
34. 川村 泉訳『感覚より思索へ』(昭22)「否定的能力」
35. Clayborough, A.: 河野 徹・上島建吉・佐野雅彦訳『グロテスクの系譜—英文学的考察』(1971)〈p. 112〉「消極的な能力」, 「消極的能力」
36. Guerin, W. L. 他著: 日下洋右訳『文学批評入門』(1986)〈p. 376〉「消極的能力」
[この訳語は同書に引用されたミラー著『神の消滅—五人の一九世紀作家』からの引用文に見えるもの。]
37. Cookson, T. 編著: 相島倫嘉訳『美の詩人ジョン・キーツの肖像』(1995)〈p. 41〉「消極能力」
38. Greer, G. 著: 川地美子訳『シェイクスピア』(1989)〈p. 118〉「消極的受容力」
39. Gray, M. 著: 丹羽隆昭訳『英米文学用語辞典』(1990)〈p. 214〉「消極的能力」
40. 五島正夫著『イギリス・ロマン派の系譜』(1997)〈p. 105〉「消極的能力」
41. 斎藤 勇著『ミルトン』(研究社英米文学評伝叢書-11-) (昭8)〈p. 131〉「消極的能力」
42. 斎藤 勇著『キーツ』(研究社英米文学評伝叢書-45-) (昭12)〈はしがき〉「順応力」
43. 斎藤 勇著『斎藤 勇著作集』第4巻 (昭50) {〈p. 87〉「消極的可能性」
〈p. 439〉「消極的でいられる能力」}
44. 斎藤 勇著『斎藤 勇著作集』第5巻 (昭51) {〈p. 3〉「消極的でいられる可能性」
〈p. 246〉「消極的能力」}
45. Sypher, W. 著: 野島秀勝訳『文学とテクノロジー』(昭47)〈p. 51〉「消極的能力」
46. 阪田勝三著『ジョン・キーツ論考』(1976)〈p. 3〉「消極的能力」

47. 佐藤 清著『キーツ研究』（1968）〈p. 9〉「消極能力」
48. 佐藤 清訳『キーツ書簡集』（岩波文庫）（昭27）「消極能力」
49. 佐藤俊彦著「キーツのパロディ製作の意義」〈『イギリス・ロマン派研究 第二号』
ネガティブ・ケイパビリティ
「否定的能力」
50. 新城 道著「キーツの美について」〈「主流」（第20号）〉「消極能力」
51. 杉本龍太郎著『[批評理論と形而上詩] 英文学の視点から』〈p. 75〉「消極的能力」
52. 鈴木喜和著『[エンディミオン] 論—「美の宗教」再考—』〈西山清・小堀隆司・桑
子利男・及川和夫編『美神を追いて—イギリス・ロマン派の系譜』
（2001）所収〉〈p. 126〉「消極受容」
53. Storr, A. 著：岡崎康一訳『創造のダイナミックス』（1976）〈p. 256〉「消極でいら
れる能力」
54. Spender, S. 著：徳永暢三訳『一篇の詩ができるまで』（1970）〈p. 30〉「ネガティ
ヴな受容能力」
55. Jennings, E. 中内正夫訳『詩をあなたのものに』（1969）〈p. 204〉「消極的可能性」
56. 瀬谷知子著『[エンディミオン] 第四巻をめぐって』〈『イギリス・ロマン派研究』
（1985）所収〉〈p. 504〉「消極的受容能力」
57. 高野正夫著『感性の宴』（昭61）〈p. 9〉「受容能力」
58. 高橋雄四郎著『キーツ研究 第5版』（1990）〈p. 25〉「否定的能力」《昭和48年刊
行の初版以降も変更がない》
59. 高橋康也・大場建治・喜志哲雄編『研究社シェイクスピア辞典』（2000）〈p. 175〉
「消極的能力」
60. 玉泉八州男著『シェイクスピアとイギリス民衆演劇の成立』（2004）〈p. 291〉「消
極的能力」《p. 298 では [キーツのいう「事実とか理由をむきになっ
て深追いせず、不確定、神秘、疑念に留まりうる能力」] なる記述が
ある。》
61. 田村英之助著「キーツ—断絶と凝視の詩学」《田村英之助訳編『キーツ詩集』
（1968）所収〉〈p. 189〉「否定的能力」
62. 田村英之助訳『キーツ 詩人の手紙』（1977）「消極的能力」
63. 塚野 耕著『キーツ研究』（昭45）〈p. 16〉「否定的能力」
64. 塚野 耕著『詩的眞実』（昭46）〈p. 125〉「否定的能力」
65. 塚野 耕著『ファンタジーの花』（昭47）〈p. 32〉「否定的能力」
66. 塚野 耕著『キーツの詩想』（昭50）〈p. 4〉「否定的能力」
67. 塚野 耕著『キーツのことば』（昭55）〈p. 3〉「否定的能力」
68. 塚野 耕著「ワーズワスとキーツ」《『イギリス・ロマン派研究』（1985）所収》
〈p. 452〉「消極的能力」
69. 塚野 耕著『英詞華断想』（平8）〈p. 113〉「消極的能力」
70. 塚野 耕著『幻実のはざままで』（平13）〈p. 16〉「消極的能力」

71. 津田迪雄著『ジョン・キーツ研究』(昭49) {<p. 5>「受容的能力」
<p. 111>「受動的能力」}
72. Dewey, J. 著：鈴木康司訳『経験としての芸術』(昭28) <p. 38>「否定的能力」
73. Dewey, J. 著：鈴木康司訳『芸術論』《‘No. 72’の再版》(1969) <p. 35>「消極的で
いられる能力」
74. 出口保夫著『キーツ・人と作品』(1974) <p. 8>「受容能力」
75. 出口保夫著『キーツとその時代(上)』(1997) <p. 257>「消極的受容力」
76. 富田光明著「憂鬱について」《『イギリス・ロマン派研究』(1985)所収》<p. 573>
「消極的能力」
77. 徳永陽三著『ことばの戦ぎ』(昭54) <p. 309>「ネガティブな受容性」
78. 中橋一夫訳『キーツの手紙』(昭15) ^{ネガティブ・ケイバビリティ}「否定的能力」
79. 野島秀勝著『孤独の遠近法』(1994) {<p. 178> ^{ネガティブ}「消極的(ないし自己否定的)
^{ケイバビリティ}能力」,
<p. 178>「自己否定的能力」,
<pp. 178, 179>「消極的能力」}
80. 野島秀勝著『自然と自我の原風景・上巻』(昭57) <p. 130>「消極的能力」
81. 野中 涼著「夢・詩・認識」《『谷崎精二博士古稀記念論文集』所収》(昭36)
<p. 69>「消極的能力」
82. 野中 涼著『小説の方法と認識の方法』(1970) <p. 199>「消極的能力」
83. 野中 涼著「ロマン派の創作過程」《『イギリス・ロマン派研究』(1985)所収》
<p. 39>「消極的能力」
84. 野中 涼著『歩く文化と座る文化』(1993) <p. 76>「消極的能力」
85. 蜂谷昭雄著「シオドア・レトキの自己回帰」《『尾形敏彦・森本桂樹 両教授退官記
念論文集』(1985)所収》<p. 683> ^{ネガティブ・ケイバビリティ}「消極的能力」
86. Hough, G. 著：出口泰生訳『ロマン派の詩人たち』(昭46) <p. 234>「受容的能力」
87. 日夏耿之介著『美の司祭』(昭14) <p. 391>「消極器量」
88. 平井正穂著「キーツ」《土方辰三編 東大教養 英語英米文学2 『イギリス文学』
(昭33)所収》<p. 134>「否定的な能力」
89. 深瀬基寛著『深瀬基寛集 第一巻』(昭43) <p. 37>「消極的未発能力」
90. 福田陸太郎著『東西相触れるとき』(昭62) <p. 14>「消極的受容力」(ネガティブ
・ケイバビリティ)
91. 福原麟太郎・吉田正俊編『文学要語辞典 改訂増補版』(昭53) <p. 191>「消極的
にしていられる能力」
92. 藤井武昭著 [イギリス・ロマン派における文学の概念—「過程」としての詩と詩
論—]《小西甚一編『比較思想文化叢書 文学概念の変遷』(昭52)所
収》<p. 188>「消極的能力」
93. 藤本周一訳『浪漫詩人の愛と苦悩(解説)』(昭48) <p. 234>「負の耐量」

94. 藤本周一著「Keats と Godwinism と Negative Capability」《『大阪経済大学教養部紀要第1号』(1983)》「可否定的能力」
95. Frye, N. 著：渡辺美智子訳『イギリス・ロマン主義の神話』(1985)〈p. 207〉「消極的に受容する能力」
96. Fraser, G. S. 著：佐藤幸雄訳『エズラ・パウンド』(昭54)〈p. 119〉「消極的ネガティブでいられる能力」
97. Brett, R. L. 著：児玉実英訳『FANCY and Imagination』(『文学批評ゼミナール6』(昭46)〈p. 71〉「消極的能力」
98. Bate, W. J.：青山富士夫訳『古典主義からロマン主義へ』(昭61)〈p. 196〉「消極的能力」
99. 前田綾美著「自意識的想像力の目ざめ」《『イギリス・ロマン派研究』(1985)所収〉〈p. 392〉「消極的受容力」
100. 松浦 暢著『美しきものは常に』(昭34)〈p. 174〉「否定的能力」
101. 松浦 暢訳『キーツの手紙』(1971)「消極的受容力」
102. 松浦 暢註『KEATS' SONNETS』(1966)〈p. 119〉「消極的受容力」
103. 松浦 暢註『KEATS' LETTERS』(昭51)〈p. 69〉「消極的受容力」
104. 松浦 暢著『キーツ——その夢と現実——』(昭54)〈p. 80〉「消極的受容力」
105. 松下千吉著『W. J. Bate: John Keats 〈書評〉』《『季刊英文学』(1964)》「消極能力」
106. 松家理恵著『キーツとアポロン』(2000)〈p. 242〉「消極的能力」
107. 松島正一著『イギリス・ロマン主義事典』(1995)〈p. 268〉「消極的能力」
108. Murry, J. M. 著：田中清太郎・窪田鎮夫共訳『魂の創造』(1972)〈p. 244〉「否定能力」
109. 宮下忠二著「キーツの美学」《『英文学風景・第1冊』》「消極的にしていられる能力」
110. 水之江有一著『キーツとロマン派の伝統』(昭54) {〈p. viii〉「否定的な能力」
〈p. 296〉「否定の能力」}
111. 望月登美子著「詩と原像——キーツ小論」《今道友信編『芸術と解釈』(1976)所収〉〈p. 173〉「消極能力」
112. 森安幸夫著『不凋花』(1958)〈p. 99〉「自己否定的能力」
113. 薬師川虹一著『イギリス・ロマン派の研究』(2000)〈p. 429〉「消極的能力」
114. 山内正一著『「アダムの夢」と「空虚な夢」の間に』〈「イギリスロマン派研究」第三号〉「消極的能力」
115. 山内正一著『キーツ研究』(1986)〈p. 142〉「消極的能力」
116. 山内久明著「II イギリスの批評2——ロマン主義時代」《『講座英米文学史12 批評・評論I』(1971)所収〉〈p. 48〉「消極的能力」
117. 山本修二著「Negative Capability について」《『英国の詩論』(昭31)所収〉〈p. 134〉「消極能力」

118. 矢本貞幹著『現代イギリスの文学思想』（昭31）〈p. 157〉「消極的能力」
119. 吉村昭男著『マシュー・アーノルドの文芸批評』（昭62）〈p. 137〉「消極的（に）
ていられる）能力」
120. Read, H. 著：相原幸一訳『無垢の探究』（1970）〈p. 67〉「自我否定的受容能力」
121. Read, H. 著：御輿員三訳『現代詩と個性』（昭35）〈p. 46〉「消極的能力」
122. Read, H. 著：長谷川鉦平訳『見えざるものの形』（1973）〈p. 146〉「消極的能力」
123. Read, H. 著：北条文緒訳『ハーバート・リード自伝』（1970）〈p. 204〉「消 極 的 能
力」
124. Read, H. 著：増野正衛訳『文学批評論』（1985）〈p. 123〉「消極的能力」
125. Read, H. 著：和田徹三訳『和田徹三全集 第4巻 翻訳篇』（昭59）〈p. 335〉「潜 在
能 力」
126. Wasserman, E. R. 著：西山 清訳『妙なる調べ』（1987）〈p. 45〉「消極受容能力」

[2] “Negative Capability” に訳語を与えていない論考等

- ① TAKESHI SAITO（斎藤勇） KEATS' VIEW OF POETRY（昭9）
- ② 阪田勝三著「キーツの詩における喜びと痛みとの関係」〈「英文学研究」39巻2号〉
- ③ 阪田勝三著「Keats と永遠——“Ode to a Nightingale” と “Ode on a Grecian Urn”
における時間」〈「英文学研究」45巻1号〉
- ④ 玉泉八州男著「シェイクスピアと外人排斥運動」〈「英語青年」1993年10月号〉
- ⑤ 長江芳夫著『詩と散文』（1975）
- ⑥ 中林光生著「“Endymion” について」〈「人文論究」16巻1号〉
- ⑦ 中林光生著『ジョン・キーツの世界』（2000）
- ⑧ 山田 豊著「キーツの詩における夢想と現実——Negative Capability の展開につい
て」〈「立命館文学」244号〉
- ⑨ 安永義夫著「洞窟の詩人たち」〈「英語英文学研究 広島大学英文学会」第7巻第
2号〉
- ⑩ 山根義雄著「Keats の Imagination」《斎藤勇博士古稀記念実行委員会編『斎藤勇博
士古稀祝賀論文集 英文学研究』（昭31）所収》